第二章　宇治八の宮の物語　薫、八の宮と親交を結ぶ

［第一段　八の宮、阿闍梨に師事］

いとど、山重なれる御住み処に、尋ね参る人なし（幾重にも山深い宮の山荘に訪ね参る人もいません）。あやしき下衆など（見苦しい身分の低い者で）、田舎びたる山賤どものみ（泥臭い山暮らし者たちだけが）、まれに馴れ参り仕うまつる（たまに気安く参って手伝いを致します）。

*峰の朝霧晴るる折なくて（峰の朝霧が晴れることもなく、気が塞いで）、明かし暮らしたまふに（宮は日々暮らしなさるのですが）、この宇治山に、*聖だちたる*阿闍梨住みけり（この宇治山に聖人めいた阿闍梨が住んでいました）。　*「峰の朝霧晴るる折なくて」は注に＜『源氏釈』は「雁の来る峯の朝霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂さ」（古今集雑下、九三五、読人しらず）を指摘。＞とある。歌を下敷きに、浮かない気分で暮らしている、という意味らしい。　*「ひじりだつ」は＜聖人めく、世俗離れした＞。　*「阿闍梨（あざり、あじゃり）」は＜師範格の僧＞らしい。

才いとかしこくて（学識高く）、世のおぼえも軽からねど（世間からも尊敬されているが）、をさをさ公事にも出で仕へず（ほとんど公式法事に出仕せず）、籠もりゐたるに（修行に籠もっていたが）、この宮の、かく近きほどに住みたまひて（この宮が斯くも近くにお住みで）、寂しき御さまに（寂しいお姿で）、*尊きわざをせさせたまひつつ（故君の追善供養を上げなさっては）、法文を読みならひたまへば（お経をいつも唱えていらっしゃるので）、尊がりきこえて（尊敬申し上げて）、常に参る（いつも宮の山荘に参上していて、）。　*「たふときわざ」は＜法要＞らしいが、宮がする法要と言えば＜故君の追善供養＞なのだろう。

*年ごろ学び知りたまへることどもの（宮が年来の読経でお知りになった経文文言の）、深き心を解き聞かせたてまつり（深い意味を阿闍梨は宮に説き聞かせ申し上げ）、いよいよこの世のいとかりそめに（いよいよ以てこの世が本当に一時的な形態で）、*あぢきなきことを申し知らすれば（決定的な意味など無い事をお知らせ申すと）、　*「年ごろ学び知りたまへることどもの」については、注に＜『集成』は主語を八宮とし「〔八宮が〕今までに学んでご承知のいろいろのことの」。『完訳』は主語を阿闍梨とし「阿闍梨は、これまでに学修してこられた数々の教義の深遠な道理を宮に説いてお聞かせ申し」と訳す。＞とある。「学び知りたまへる」の敬語遣いと上文の「法文を読みならひたまへば」を受ける文脈から、主語は＜宮＞なのだろう。上文の「常に参る」で句点とせず、読点で此処の文に続ける校訂にすべきかも知れない。即ち、「尊がりきこえて常に参る、年ごろ学び知りたまへることどもの、深き心を解き聞かせたてまつり」を挿入句と見做す。　*「あぢきなし」は＜不当だ、不都合だ、無益だ＞などと古語辞典にあるが、この世を＜不当だ、不都合だ、無益だ＞と言う事に、そう言いたい時があるのは分かる気もするが、それは厭な場面での不満表明なので、「この世」という対象概念の価値質把握に、不満を示しても意味があるとは私には思えないので、「かりそめ」を＜本質的に意味あるものではない＞と言い換えることで、此処の文意はお茶を濁して置こうかと思う。しかし私は、この手の話は、どう言えば本人が気が楽になるか、という一種の処世話術の類であって、「この世」とか「あの世」という概念設定が本当に正しいのか否か、そこにどんな価値があるのか、などは、物質性向を認識しようとする量子論とは違って、正解の無い思索であり、といって思索する価値は否定しないし、同じ人間の考えることだから何処かで気脈が通じることも有るかとは思うが、何れ対象概念の設定自体を断定する意味を信じない。

「心ばかりは*蓮の上に思ひのぼり(気持ちの上では仏道に帰依し)、濁りなき池にも住みぬべきを(善行を積みたいと思うものの)、いとかく幼き人びとを見捨てむうしろめたさばかりになむ(実にこのように幼い子供たちを見捨てることの後ろめたさがあって)、えひたみちに容貌をも変へぬ(一途には剃髪して修行僧姿にもなれません)」　*「はつすのうへにおもひのぼり〜」は注に、宮の仏心帰依を＜『阿彌陀経』を踏まえた表現。「住み」「澄み」の掛詞。＞とある。

など(などと宮は阿闍梨に)、隔てなく物語したまふ(身分の隔てもなしにお話し申しなさいます)。

［第二段　冷泉院にて阿闍梨と薫語る］

この阿闍梨は、冷泉院にも親しくさぶらひて、御経など教へきこゆる人なりけり(この阿闍梨は冷泉院にも親しく仕え申して経文などをお教え申す人なのでした)。京に出でたるついでに参りて(都へ所用があったついでに冷泉院に参上して)、例の、さるべき文など御覧じて(いつものように重要な経文などを御覧に入れて)、問はせたまふこともあるついでに(院がご質問なさることもある対面の際に阿闍梨は)、

「*八の宮の、いとかしこく(宇治の八の宮がたいへん畏れ多くも)、*内教の御才悟り深くものしたまひけるかな(経文の教えを深くご理解なさっているのです)。　*「八の宮」は宇治の古宮が＜桐壺帝の第八親王＞である事が此処に初めて明示された注目すべき記事だ。 *「ないけうのおおんざえ」は仏僧の言葉で言う＜経文の教え＞のことらしい。

*さるべきにて(仏僧になるべくして)、生まれたまへる人にやものしたまふらむ(お生まれになった人でいらっしゃるのかもしれない)。　*「さるべき」は注に＜仏教者となるべき前世からの因縁で生まれたのか、の意。＞とある。

心深く思ひ澄ましたまへるほど(深く思考して悟り澄ましていらっしゃるのが)、まことの聖の*おきてになむ見えたまふ(真の聖人のあるべき姿のようにお見えになります)」と聞こゆ(とお話し申します)。　*「おきて」は＜心構え＞ともあるが＜決まりごと、定型＞ともあるので、「まことの聖」なら＜そうなるであろう形→あるべき姿＞と読んで置く。

「いまだ容貌は変へたまはずや(まだ出家はされていないのか)。俗聖とか(ぞくひじりとか)、この若き人びとの付けたなる(今、若い人たちが言ったようだが)、あはれなることなり(感心なことです)」などのたまはす(などと院が仰います)。

*宰相中将も(宰相中将の薫君も)、御前にさぶらひたまひて(この御前の席に伺候なさっていて)、「われこそ、世の中をばいとすさまじう思ひ知りながら、行ひなど、人に目とどめらるばかりは勤めず、口惜しくて過ぐし来れ(自分こそ世の中をとても遣り切れないものと思い知りながら念仏上げなどを人目に付くようには励行せずに不本意に過ごして来てしまった)」と、人知れず思ひつつ(と内心で思いながら)、「俗ながら聖になりたまふ心のおきてやいかに(在世にあって賢僧にお成りという心境とはどういうものか)」と、耳とどめて聞きたまふ(と興味深くお聞きなさいます)。　*「宰相中将も御前にさぶらひたまひて」は注に＜薫。「匂兵部卿」巻に十九歳で三位兼中将

となる。＞とある。此処で桐壺帝の八の宮と薫君が繋がった。そして遂に、話が今に繋がった、のだろう。そして、この時が薫君 19 歳の年のことだった、という年立ての基準値になっている、ということのようだ。非常に重要な一文だ。いや、だがしかし、「宰相中将」とあるだけでは＜19 歳以降のこと＞と知れるだけで、この時点を＜19 歳のこと＞と絞り切る事は出来ない。が、匂兵部卿巻二章五段には「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず。帝、后の御もてなしに、ただ人にては、憚りなきめでたき人のおぼえにてものしたまへど、心のうちには身を思ひ知るかたありて、ものあはれになどもありければ」とあって、「心のうちには身を思ひ知るかたありて」が何を言っているのか分からないと当該部分のノートに私は記していて、また現在ノート時点で私は本分未読ながら、当巻の第四章の副題に「薫、出生の秘密を知る」とあり、匂兵部卿巻二章の五段以前には薫君は漠然と出自に疑問を持っていたと語られていたのが、五段の前出引用部分になって「身を思ひ知るかたありて」と具体事情を知ったと語られていることから、その具体事情が当巻四章に示されているなら、相当程度濃厚に此処の記事が＜薫君 19 歳のこと＞に符合する、ということになる。是でほぼ、この＜物語上の今現在＞を＜薫君 19 歳の年＞と見做せそうで、冒頭概説に左様付記する。まだ幾分かの不確定要素はあるが、先ずは一安心着けた。

「出家の心ざしは、もとよりものしたまへるを(宮は出家の本意はもとよりお持ちでいらしたが)、はかなきことに思ひとどこほり(奥方への現世未練があって思い留まり)、今となりては、心苦しき女子どもの御上を、え思ひ捨てぬとなむ(今となっては母君に死に別れた不憫な娘御たちの御世話を見捨てられないと)、嘆きはべり*たうぶ(本意の果たせぬを嘆いていらっしゃいます)」と奏す(と阿闍梨は院にご説明申し上げます)。　*「たうぶ」は「たまふ」の重々しい言い方らしい。

さすがに(それにまた)、物の音めづる阿闍梨にて(音楽好きな阿闍梨だったので)、

「げに、はた、この姫君たちの、琴弾き合はせて遊びたまへる(実にまたこの姫君たちの弦楽器を合奏なさる音色が)、*川波にきほひて聞こえはべるは、いとおもしろく(宇治川の波音と優を競って聞こえてきますのはとても風情があって)、極楽思ひやられはべるや(極楽かと思われます)」　*「川波にきほひて聞こえはべる」は漢詩か古歌を引いた言い回しなのだろう。下に「古体にめづれば」とある。が、注は無く、不明だ。

と、古体にめづれば(と古風に褒めると)、帝ほほ笑みたまひて(院はほほ笑みなさって)、

「さる聖のあたりに生ひ出でて(そのような世離れした人の家で育って)、この世の方ざまは、たどたどしからむと推し量らるるを(世馴れざまのことは覚束無かろうと推し量られる所を)、をかしのことや(面白いものだ)。うしろめたく、思ひ捨てがたく、もてわづらひたまふらむを(宮は姫君たちが気懸かりで見捨て難く心配なさっているらしいので)、*もし、しばしも後れむほどは(たぶん私が少しは後に残るだろうから)、譲りやはしたまはぬ(お譲り下さらないだろうか)」
*「もし～ほどは」は仮定構文だろうか。「ほど」には＜道程＝道筋=理屈＞の意味はあるのかも知れないが、「後れむほど」の「ほど」は＜理屈＞ではなく＜分量＞を示すので、「しばしも後れむほどは」は＜「しばし」の残った時間だけは＞という言い方になる。ちょっとでも残った分だけ、みたいなことを院は言ったのか。有り得ない。相手は人だ、姫君だ。「もし」は仮想を示す副詞でもあるが、大辞泉に＜（疑問や推量の表現を伴って）確実ではないが、十分ありうるさま。もしや。あるいは。ひょっとすると。＞ともあり、此処では「ほどは」は「譲りやはしたまはぬ」という疑問文での条件項となっていて、「確実ではないが、十分ありうるさま」を言い表す言葉には＜たぶん＞というのがあるので、此処での「もし」は多分それだ。

*などぞのたまはする(などと仰ったのです)。*この院の帝は、十の御子にぞおはしましける(この冷泉院は桐壺帝の第十親王なのでいらっしゃいました)。*朱雀院の、故六条院に預けきこえたまひし、*入道宮の御例を思ほし出でて(朱雀院が故六条院に皇女を預け申しなさった入道宮の御例を思い出しなさって)、「かの君たちをがな(その姫君たちを得たいものだな)。つれづれなる遊びがたきに(退屈紛れの遊び相手に)」などうち思しけり(などと内心でお思いになったのです)。

*「などぞ」の「ぞ」は意外性を示しているのだろうか。だとすれば、恐らくは冷泉院が高齢であることに対する驚きだろうか。薫君が 19 歳だとすれば、冷泉院は 29 歳上なので 48 歳。相手にもよるだろうが当時としては高齢なのだろう。ただ、貴族は他者の労力供給を現代人のエネルギー消費に近いほど受けていたので、生活の仕方によっては現代人並の若さを保っていたことは大いに有り得るかと思う。 *「この院の帝は十の御子にぞおはしましける」については、「にぞ」の念押しに弥に事改まった印象を受けた。というのも、冷泉院が桐壺帝の第十皇子だということは疾うに分かっていることであり、であれば、八宮の弟君に当たることも自明だ。が、この序列を当然に知っていた心算が、さて、本文の何処にあったのか、となると定かではない。もしかすると、此処の一文を何処かの注で引いてあって、それをそのまま規定事実として信じていただけなのかも知れない。とにかく、この一文が本文に於ける第十親王の明示であることは重要だ。 *「朱雀院の、故六条院に」という言い方は、朱雀院がまだ存命であるような印象を受ける。この物語では重要な人物の死去が往々にして語られないが、朱雀院の死も語られていないかと思う。存命なら薫君と 50 歳違いなので 69 歳の筈だ。それに何と、光君の没年さえ明示が無いが、匂宮巻が光君の没後少なくも一年以上は後から始まっているようで、時に薫君 14 歳の年だったので、今からは 7 年以上前に亡くなっているかとは思う。となると、光君は朱雀院の 3 歳下なので 60 歳前には薨去していることになる。 *「にふだうのみやのおおんためし」は光君 40 歳、女三の宮 15 歳の時の結婚だ。八宮の姫たちの年齢はまだ不明だが、冷泉院は 48 歳だ。しかも一年前の四月に玉鬘の 19 歳の長女を嫁に取り、この四月に第二内親王を儲けたばかりかと思われ、光君存命中は影が薄かったが、晩年の此処へ来て老いて益々盛んという爆発力を見せている。憑きが落ちた、みたいな気がしないでもない。

[第三段　阿闍梨、八の宮に薫を語る]

中将の君、*なかなか(中将の薫君は、しかしながら姫君ではなく)、親王の思ひ澄ましたまへらむ御心ばへを(八宮の悟り澄ましていらっしゃる御心境を)、「対面して、見たてまつらばや(お会いして、拝見申し上げたい)」と思ふ心ぞ深くなりぬる(と思う心が深くなるのでした)。 *「なかなか」は注に＜『完訳』は「この時四十九歳の院が姫君に関心を抱くのに比べ、年若の薫がかえって父八の宮への関心を強めた、の意。「なかなか」は予測に反する気持」と注す。＞とある。確かに、上文は、冷泉院が高齢にも関わらず姫君に関心を寄せている事を殊更に強調する語り口、だったに思う。この対比は明示補語した方が分かり易そうだ。ところで、『完訳』は「この時四十九歳の院」としてあるらしいが、ということは、この年を薫君 20 歳の時、と取っているのだろうか。本文に左様の明示が無い限りは、私は薫君 19 歳の時と読んで置く。

さて阿闍梨の帰り入るにも(そして阿闍梨が帰途に着くときにも)、

「かならず参りて、もの習ひきこゆべく(必ず伺って教えを請い申したいと)、まづうちうちにも、けしき賜はりたまへ(先ず内々にも打診頂きたい)」

など語らひたまふ(などと相談申しなさいます)。

帝の、御言伝てにて(冷泉院は御文遣いに挨拶を言伝て)、「あはれなる御住まひを、人伝てに聞くこと(御立派な御修行暮らしを人伝にお聞き申しまして)」など聞こえたまうて(などと申し上げなさって、八宮にこう贈歌なさいます)、

「世を厭ふ心は山にかよへども、八重立つ雲を君や隔つる」(和歌 45-05)

「心は通う山なれど、ひじりの高み仰ぎ見る」(意訳 45-05)

阿闍梨、この御使を先に立てて、かの宮に参りぬ(阿闍梨はこの冷泉院の御使者を恭しく先に立てて宇治の八宮邸に参上しました)。なのめなる際の(並の身分の)、さるべき人の使だにまれなる山蔭に(用件のある使いでさえまれな山荘に)、いとめづらしく(実に珍しい来客で)、待ちよろこびたまうて(宮は喜んで迎え入れなさって)、所につけたる肴などして(宇治名物の酒菜などで)、さる方にもてはやしたまふ(精々歓待なさいます)。

御返し(御返歌)、

「あと絶えて心澄むとはなけれども、世を宇治山に宿をこそ借れ」(和歌 45-06)

「登る心算じゃなかったが、世を宇治山があったから」(意訳 45-06)

*注に＜八宮の返歌。「世」「心」「山」の語句を受けて返す。「住む」「澄む」の掛詞。『河海抄』は「わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人は言ふなり」(古今集雑下、九八三、喜撰法師)を指摘。＞とある。「世を宇治山」は＜世を憂しとして宇治山＞っていう、みんなの言い方っつうことで良いんじゃないの。っていうくらい、この参照歌は有名らしく、ウエブ検索すると大量のサイトがヒットする。小倉百人一首の八番歌らしいっすね。で、もう言い尽くされた感いっぱいだが、やっぱり洒落ている。「わがいほは みやこのたつみ しかぞすむ よをうぢやまとひとはいふなり」の「しかぞすむ」は如何にもワザとらしい。十二支で辰巳の次は午未の所を「しかぞ」と言うのは、鹿を馬と言って人を馬鹿にする者へのアテツケ。だから、「しかぞ住む」は「然ぞ(それなりに)」よりは「確ぞ(しっかりと)」の方が気分が良い。後はもうサイトの大波で息も継げない。ただ、八宮や阿闍梨の印象付けに作者がこの歌を意識したことは確かだ。

*聖の方をば卑下して聞こえなしたまへれば(宮は仏道修行の研鑽ぶりを謙遜して、このようにお詠み申しなさったので)、「*なほ、世に恨み残りける(まだ世情に恨みがあるな)」と(と、宮が悟っていないと言うのを真に受けて)、いとほしく御覧ず(冷泉院は気懸かりに御思いなさいます)。　*「ひじりのかた」は＜仏道修行の研鑽ぶり＞なのだろう。　*「なほ世に恨み残りける」は、単に＜まだ現世に未練がある＞ではなく、自分と皇太子位を競った政変に＜まだ拘りがある＞と、冷泉院は八宮の心境を推し量った、と読んで置く。

阿闍梨(阿闍梨は八宮に)、中将の、道心深げにものしたまふなど(中将が仏道救済を深く求めていらっしゃるような事を)、語りきこえて(お話し申し上げて)、

「法文などの心得まほしき心ざしなむ(経典文言の意味を知りたい意向を)、いはけなかりし齢より深く思ひながら(幼い時分から深く思いながら)、*えさらず世にあり経るほど(どうしても、

成人して就職する内には)、公私に暇なく明け暮らし(公私に暇なく明け暮らすので)、　*「えさらず世にあり経るほど」は＜止むを得ず世にあって時を過ごす内＞みたいな言い方だが、そう言ってしまえば誰でもそうしているような気もするが、「世にあり経るほど(勤労生活)」を特に「え避らず(避けられず、止むを得ず)」と意識するのかと言えば、そうでもなく普通のことに思っている気もして、この「え避らず」は「世にあり経るほど」に形容句として掛かるのではなく、「公私に暇なく明け暮らし」に掛かって＜やむを得ず＞ではなく＜つい、どうしても＞くらいの副詞語用と読むのが良さそうに見えてくる。であれば、「世にあり経るほど」は「いはけなかりし齢より深く思ひながら」を受けるので＜成人して就職する内に＞という意味になり、「明け暮らし」の連用中止が事情説明の構文を示すので＜明け暮らすので＞という言い方になって、下の叙述展開に説得力を加えている、かと思う。

わざと閉ぢ籠もりて習ひ読み(殊更に家に閉じこもって経文を習い読んで)、おほかたはかばかしくもあらぬ身にしも(然して理解の進まない身ながらも)、世の中を背き顔ならむも(修行僧然とした顔をするのも)、憚るべきにあらねど(してはいけないものではないが)、おのづからうちたゆみ(つい怠けて)、紛らはしくてなむ過ぐし来るを(雑事にかまけて過ごして来たのを)、

いとありがたき御ありさまを承り伝へしより(大変尊いあなた様の御姿を伝え聞き知り申し上げて以来)、かく心にかけてなむ(深く信奉し)、頼みきこえさする(頼りにし申し上げています)、など、ねむごろに申したまひし(などと熱心に申しなさっていました)」など語りきこゆ(などとお話し申します)。

宮(宮は)、

「世の中をかりそめのことと思ひ取り(世の中を一時的なものと考え付き)、厭はしき心のつきそむることも(生きるのを辛く思い始めるのも)、わが身に愁へある時(自分に思うに任せない事情がある時に)、なべての世も恨めしう思ひ知る初めありてなむ(世の中の全てを厭なものと思い知り出すことで)、道心も起こるわざなめるを(仏道による救済を求める気持も起こるものなのに)、年若く世の中思ふにかなひ(まだ若く世の中も思いに適い)、何ごとも飽かぬことはあらじとおぼゆる身のほどに(何事にも不満の無さそうに見える立場で)、さはた(そんなにもまた一方で)、後の世をさへ(来世に結ぶ深い人生の意味まで)、たどり知りたまふらむがありがたさ(考え至ろうというのは尊いことです)。

*ここには、さべきにや(私はそういう辛い目に遭う運命だったのか道心を起こして)、ただ厭ひ離れよと(ただ悩みを忘れろと)、ことさらに仏などの勧めおもむけたまふやうなるありさまにて(偏に仏などのお導き下さる教えによって)、おのづからこそ(やっとどうにか)、静かなる思ひかなひゆけど(静かな心境になりましたが)、　*「ここ」は話者が示す自分、即ち＜私＞。「には」は＜～に於いては＞という事情説明構文。「ここは」なら「さべきにや」は＜そうあるべきものだったのか＝そういう運命だったのか＞という定型句のように見えるが、「ここには」だと「さ」は上述した「わが身に愁へある時、なべての世も恨めしう思ひ知る初めありてなむ、道心も起こるわざなめる」を丸々受けているので、「さべきにや」は＜自分はそういう悲運だったのか、道心を起こして＞までを含意する。という格助詞「に」の効果絶大なる文例、なのだろうか。私には、この文は意外な難文だった。

残り少なき心地するに(余命少なに思えるものを)、はかばかしくもあらで(仏典理解は然して進まずに)、過ぎぬべかめるを(終わってしまいそうで)、来し方行く末(生涯を通して)、さらに得たるところなく思ひ知らるるを(もうこれ以上何も起こらない気がしていましたが)、かへりては(今さらに得られた)、心恥づかしげなる法の友にこそは(尊敬を持って向き合える学友で)、ものしたまふなれ(あなたはいらっしゃいます)」

などのたまひて(などと仰って)、かたみに御消息通ひ(互いに近況を知らせ合いなさり)、みづからも参うでたまふ(中将は自らも宇治の八宮邸に参上なさいます)。

[第四段　薫、八の宮と親交を結ぶ]

*げに聞きしよりも(実に話に聞いていたよりも)、あはれに住まひたまへるさまよりはじめて(質素なお暮らしぶりを初めとして)、いと仮なる草の庵に(たいそう簡素な草庵住まいと)、思ひなし(宮を聖と仰ぎ見る所為か)、ことそぎたり(邸は殺風景でした)。　*「げに聞きしよりも」は「あはれに」に掛かるのではなく、「ことそぎたり」に掛かるものとして読んで置く。

同じき山里といへど(同じ山荘でも)、さる方にて心とまりぬべく(それなりの風情があって)、のどやかなるもあるを(寛げるものもあるが)、いと荒ましき水の音、波の響きに(この宇治の宮邸はとても荒々しい流れの音や波の響きに)、*もの忘れうちし(考えがまとまらず)、夜など、心解けて夢をだに見るべきほどもなげに(夜などは心安らかに夢を見ることすら出来ないほど)、すごく吹き払ひたり(山おろしが凄く吹き払うのです)。　*「もの忘れうちし」は＜宇治(うぢ)だけに＞という洒落語用だろうか。「もの忘れ」は＜［名］(スル)物事を忘れること。古くは多く、悲しみや苦痛を忘れることにいう＞と大辞泉にあり、現代語で言う＜うっかり忘れ＞ではなく、古語では＜物思いを忘れること＞をいう事が多いらしい。が、「もの忘れ打つ」は＜考えを忘れて放り出す→考えがまとまらない＞みたいな語感だ。

「聖だちたる御ために、かかるしもこそ、心とまらぬもよほしならめ(聖人たる宮にとってはこうしたことも気にならない趣向だろうが)、女君たち、何心地して過ぐしたまふらむ(姫君たちはどういう気分でお暮らしなのだろう)。世の常の女しくなよびたる方は、遠くや(普通の女らしい柔らかな物腰とは、違うんだろうな)」と推し量らるる御ありさまなり(と中将には推し量られる御様子でした)。

仏の御隔てに、障子ばかりを隔ててぞおはすべかめる(仏間との間とは襖障子ひとつで仕切って姫君たちは住んでいらっしゃるようでした)。好き心あらむ人は(女好きの人なら)、けしきばみ寄りて(興奮して近付いて)、人の御心ばへをも見まほしう(相手の反応も知りたい所で)、さすがにいかがと(さすがに中将も姫君たちの様子がどんなものかと)、ゆかしうもある御けはひなり(知りたくなるような宮邸の無防備さです)。

されど(しかし中将は)、「さる方を思ひ離るる願ひに(そういう世俗の女遊びを忘れる目的で)、山深く尋ねきこえたる本意なく(こうして山深く宮邸をお訪ね申した信心に反して)、好き好きしきなほざりごとをうち出であざればまむも(好色じみた場当たりの気持を口にして面白がろうというのは)、ことに違ひてや(間違っている)」など思ひ返して(などと思い直して)、

宮の御ありさまのいとあはれなるを(宮の御姿がとても尊いのを)、ねむごろにとぶらひきこえたまひ(丁重に御見舞申し上げなさり)、たびたび参りたまひつつ(幾度も参上なさっては)、思ひしやうに(中将が思っていたように宮は)、*優婆塞ながら行ふ山の深き心、法文など(在家僧ながら人里離れた山に籠もって修行する深い信仰心や経典文言の意味など)、わざとさかしげにはあらで(殊更に学識をひけらかすことなく)、いとよくのたまひ知らす(とても分かり易くお話しなさいます)。　*「優婆塞(うばそく)」は＜男性の在家仏教信者。清信士(しょうしんじ)。近事男(ごんじなん)。＞と大辞泉にある。注には＜『花鳥余情』は「優婆塞がおこなふ山の椎本あなそばそばしとこにしあらねば」（宇津保物語、菊の宴）を指摘。＞とある。此処の言い回しは如何にも指摘された参照歌を下敷きにしているようだが、「優婆塞ながら行ふ」という言い方の意味自体は文字通りの＜在家僧でありながら勤行する＞という意味で、此処の文意は通るように見える。それでも、こうした言い回しをすることに、どうやら作者はこの八宮の宇治隠棲構想に、その設定自体は執筆当時の世相反映もあるかとは思うが、物語の仕立てや仕掛けの方法として「うつほ物語」に習っていて、しかもそのことを読者に想起させようとしているように見える。そこに特別な意図があるのか、単なる読者との共通基盤認識の確認なのかは私には分からず、一応は後者と見て、深い意味は無く、執筆当時の作者の気分だったと思って置くが、だとしても、此処で「うつほ物語」を見て置く事が、少しでも作者および当時の読者の認識に近付く、ほとんど必須に近い有効な方法の一つとして、この「源氏物語」を特に此処以降を読み進むには、相当に意味があるものに思えてならない。それに、この「源氏物語」を此処まで読んで来た今なら、少しは「うつほ物語」の方も立体的に読めそうな気もする。で早速、小学館の「新編　日本古典文学全集」の 14 巻から 16 巻、「うつほ物語 1～3」中野幸一・編を通読する。と、この参照歌は「うつほ物語」の「菊の宴」巻にある源左大将邸で催された神楽の場面で歌われた神楽歌の一つとして紹介されてもいるが、同じ源左大将邸での神楽場面は「嵯峨の院」巻に於いても語られている。実に、この重複記事は「うつほ」研究での問題箇所の一部でもあるようで、源氏物語の当該項目のノートとしては全く余計な問題ながら、こうして関わってしまった序でに、この重複問題についても下に雑感を記す事にするが、ともあれ、この歌の引用元は私見での便宜上、主に「嵯峨の院」の場面として見て置く。さて、この参照歌はその場面で四歌紹介されている内の二番目で、一番目の歌が「さかきばの(榊葉の)かをかうばしみ(香を芳ばしみ)とめくれば(求め来れば)やそうじひとそ(八十氏人ぞ)まとゐせりける(円居せりける)」という＜宇治＞絡みであり、この神楽歌も＜宇治物語構想＞に於いては意識されているように見えて来る。マ、それはそれとしても、この二番目に「優婆塞」なる在家ながらも仏門僧が登場することに、神前に奉る神楽歌であってみれば些かは違和感がある。で、思うに、この歌は修行の厳しさやその光景を訴えているものではなく、そも冗句なのだろう。「優婆塞がおこなふ山の」までは文字通りの場面設定だろうが、「椎(しゐ)」は＜ドングリの木＞で「椎本(しゐがもと、椎の木の下)」はドングリだらけでソバの実のように＜ゴツゴツしている＞ので、「床にしあらねば(寝床には出来ない)」という揶揄で、在家僧の念仏は熟なれていない(そばそばし)ので聞き苦しい、やはり出家僧の修行三昧ほどには慣れていないから(常にしあらねば)なんだろうね、と陰口を叩いている。で、神様にも下世話に笑ってもらおう、みたいな。で、此処での言いまわしは、「わざとさかしげにはあらで」に洒落ているのだろう。と、此処までが当該項目での本題ノートだ。・・で、以下に記す「うつほ物語」の読後雑感は余談なのだが、この参照歌の引用元の箇所が「うつほ物語」に於ける重複記事の部分であり、否応無しにその差異を認識させられてしまったことから、幾分かの感想は抱いてしまったし、余所にそれを書き留める適当な場所もないので、此処に記して置く。それに元々、是は何れ私の個人ノートではあり、何を如何書こうと自由なワケで、序でにこの「うつほ物語」の感想をまとめるのは、この「源氏物語」の語りのクセみたいなものを知る一つの手掛かりにもなりそうなので、この物語をさらに読み進むにも大いに参考になり得る事を期待して、此処に記す意味は其也にあるような気もして、全体の感想も少し言及して置く。というのも、「うつほ物語」の物語りの時代背景は朱雀帝代(実在位 930～946 年)に設定されていて、物語上の大枠はこの「源氏物語」と同じ王朝期であり、舞台背景も王家およびその摂関家である源氏家と藤原家という同じ構成となって

いて、「うつほ物語」が「源氏物語」に先行して成立していたなら、「源氏物語」は「うつほ物語」を元に構想された、ように見えるので、大いに比較考証に値すると思えるからだ。尤も、左様なことは学会の常識みたいなことではあるらしいが、私も今にして、辛うじてその一端を知った、ということではありそうだ。で、問題の＜東宮の残菊の宴～左大将邸の神楽＞の場面が「嵯峨の院」と「菊の宴」に重複している箇所だが、「嵯峨の院」の当該場面の内容はほぼ丸々「菊の宴」に組み込まれて居り、逆に「菊の宴」から「嵯峨の院」へは抜き出しのようなことになりそうだが、「嵯峨の院」での＜東宮の残菊の宴＞が「俊蔭」巻末の八月の話題から引き続く九月の話題として語られる連続性に比して、「菊の宴」では巻頭から行き成り十一月の話題として＜東宮の残菊の宴＞が語られ始めていて、「菊の宴」から「嵯峨の院」への逆流は不自然だ。雑感での印象では、「嵯峨の院」が古い形で、「菊の宴」が＜涼（すずし）伝＞を取り込む際に「嵯峨の院」を書き直したものであり、他の巻の古い形は新しい形に吸収されたか、切り離されたかして「うつほ」としては伝えられなかったのだろうが、「嵯峨の院」はその＜権勢家の季節行事細目自体の記録性の高さ＞ゆえに古い形で保存された上に、内容が物語展開としては経過場面の連続なので独立した逸話にし損なった、または仲頼を実忠に置き換えたものの仲頼の処遇が懸案だった、まま「うつほ」の一つとして残って伝わってしまった、ように私には感じられた。尤も、神楽の夜の座興で当世物真似ごっこらしき「才名乗り（ざえなのり）」の場面では、「菊の宴」の方が「嵯峨の院」の其よりも詳しく分かり易く、「嵯峨の院」の先行が疑わしい面もあるようだが、是は正に古典全集の中野氏の指摘にもある「脱文を想定する説もある」の説に頼りたい。それ以上は何も言えないが、気になるのは紫式部（が作者だとして）が下敷きにしていた「うつほ物語」が「嵯峨の院」なのか「菊の宴」なのか、という点だ。私には何となく「嵯峨の院」だったように思えるが、「蔵開（くらびらき）」巻の、関白備忘録みたいな詳細点描の語り口や人物設定や話の展開は、当然と言えば当然にも「源氏物語」とは違うワケだが、皇女降嫁で話を別局面に導く構想設計上での「若菜」巻との類似性を思うと、むしろ今に伝わる形に近い「菊の宴」系統のものを紫式部は意識していたのかも知れない、ような気もして来る。マ、分からないので、この話題は此処までにして置く。が、さて、それにしても、「うつほ物語」という物語名だが、是がおよそ物語の内容を言い表していない。「うつほ」は「空洞」であって、それ自体が暗示的な語だが、是を物語名に引く理由は、「俊蔭伝」に於いて、物語での主要な人物と位置付けられる俊蔭（としかげ）の孫の仲忠（なかただ）が、母と共に熊から譲り受けた杉の大木に覆われた洞穴で暮らし育った、という説話に基づいているらしい。が、是は私の視点と言うよりは、編者の中野幸一氏の解説を初め大方の専門家の認識でもあるらしく、ほぼ其等の受け売りだが、「俊蔭伝」は、本編としてまとめられた幾つかの御時世話または実相に、物語としての架空性や整合性、そして時に権威性や説得力などを与えるための演出として、序文風に設置された別の逸話であるらしい。だから多分、「俊蔭伝」の原型は、子供向け、ないし一般大衆向けに、仏教がこの日本国に伝来して、それを国家経営の主軸理論に据える正統性を、仏典にある極楽浄土を旅した日本人の天才が居たという筋書きで、仏典講義に先立って親しみを与え、教義内容はともかくも、唐楽の甘美な説得力によって、感覚的に有難味を知らしめようと言う意図で企画された伝記風で神話的な作り話で、俊蔭が帰朝して朝廷の中枢に迎えられた、ということで終わっていたもの、だったのだろうと私も推測する。その後日談である俊蔭の娘とその子の仲忠の空洞奇譚は、神通力の一言であらゆる状況を説明し得るという、その神話語りの都合良さによって、幾つかの話の整合性を取ると共に、物語全体を繋ぐ大きな主軸である「あて宮」なる＜源氏姫＞という伝統王家筋（筋である事が大事で王家自体では正史になってしまう）の登場人物設定に対抗し得る、先進文化の権威たる「仲忠」なる＜藤原君＞という相対存在としての人物設定を図ったもの、として加筆されたのだろう。ただし、この仏教説話が巻頭に配されることの功罪は大きそうで、本来は宮中の女房や侍の世間話であったろう本編を、妙にとっつき難く、神秘的に印象付けて、それが狙いなのか如何かは知らないが、今日での広い認知度を＜うつろ＞にさせているように見える。そして本編だが、その話題自体は、源氏物語の光君と紫君というほどの明確な主軸設定が無く、今のところ私にとっては雑感以上の興味は持てないが、その語り口に於ける登場人物の続柄や地位や年齢や儀式進行などの細かな明示による記録性の高さは、男の視点を感じさせる確かなもので、あて宮に懸想する貴公子たちとの和歌の贈答を狂

言回しに、権勢家を舞台に語られる四季折々の行事の描写は、それ自体が源氏物語を凌ぐ王朝絵巻ではありそうだ。実際の宮廷行事は恐らく公文書記録に詳しいかと思われるが、王朝の世情実態は正に有力家によって体現されていたのであり、「うつほ物語」が当時の世相を立体的に伝える資料のひとつである事は間違いないだろう。行事を主催する権勢家は、着飾って参集する貴族たちに持て成しの飲み食いや歌舞の宴会で豪奢を競い、菓子や衣類の引出物に工夫を凝らし、呼ばれた主賓は祝い品に馬を贈り、式の盛大を援ける為に人手を貸し、牛車の行列で都中に名声を轟かす。盛大な宴会、豪華な衣装、高性能の自動車などが多くの人々の心躍る関心事であり、消費経済と技術革新を刺激し豊かな社会を指示する、という祭の政治性は今も変わらない。が、それが貴族の生活のほとんど全てであったらしいところが、現代人の生活感には、当の貴族の立場にしても、支える庶民であったとしても、耐えられない素朴さに見えてしまう。いや、個人としての素朴で純粋な土着生活、特に自給自足生活に於ける自然環境に適応する複雑さや手応えは、現代人にとっても非常に有効な価値観だろうし、伝統文化の誇り無しに自尊認識のしようも無いだろうが、社会組織および機構に於ける流通性および記号管理能力が生産性の低い素朴な実物主義による世界観のままでは、今日に実現されている世界人口を担保出来ない。と、是は論点が飛んだが、話を戻して、およそ細かな描写の事務実務自体は、女の細かな注意力に優位性があるような気もするが、女は目先の立場上での従順性によって評価を得ようとするのに対して、男は組織機構への忠誠心で律儀に勤めを果たそうとするので、描写の細かさや確かさは男女差ではなく個人の立場や経験や資質に応じるとしても、物語りに際して要不要の判断の前に客観事実を記録しようとする動機や習慣は、やはり男の物性認識の優位意識によるのだろう。反面、要不要の判断の前に自分の関心事以外が目に入っていない女の洞察眼は鋭く深く、表層事象の心理把握に優れた生存本能を発揮する。尤も、主観偏重は場合によっては表層事象の客観把握に劣って敢え無く個体上では物質消失するかも知れないが、それは個別事情であって、おおよそ女の意識性向は義よりも情だ。逆に言えば、「うつほ」の男性的記録性の高さは物語推移の興味を追う目には、むしろ邪魔に思えることさえあるかもしれず、特におよその事情を知る当時の読者にしてみれば冗長な語り口なのかも知れない。が、それでも、当時の事情を知らない私のような者にとっては、記事の真偽はともかく、語られていることに当時の読者が一定の説得力を感じていたなら、そうでなければ語り継がれていない筈なので必ずや能弁であった筈だが、筋も人物も有り得る設定として受け止められていたことになるので、この「うつほ物語」に記された世界を現実味のある可能性の一例として読む事が出来そうだ。ただ、私が是を読めると言っても、「新編日本古典文学全集」の「うつほ物語」の読み易さは、中野幸一という編者の仕事の功績によるところが多いらしく、改めて敬意を表しておきたい。が、読み易いとは言っても、言い換え文での補語が紛らわしい場合も無くはなく、それでも其等は、ほとんどの場合は校訂や注釈の労作で解決する事が多いのだが、本文自体にある分かり難さは、官位設定の錯誤という紛らわしさに止まらず、特に「嵯峨の院」で語られた八月から年末までの話が「吹上の下」と「菊の宴」に書き換えられて重複しているらしい、という混乱などで、そも物語構成の一貫性に難が有るワケで、この「うつほ物語」の巻序も相当に問題はありそうだ。となると、其に比べればだが、この「源氏物語」では話の一貫性という点に於いては「うつほ物語」よりは破綻無く辿れそうなので、やはり研究者による一層の巻序整理は望まれるところだし、また本文自体についても、作者の客観的な説明不足に私はとても苛立っているので、「うつほ物語」と比べ見ればどうしても、何でもう少し程良い所で書かれていないのかと残念に思えてならない。尤も、この「源氏物語」では舞台の具体事情が省かれているから、専ら話の筋を追って、その限りで分かったような気になって此処まで読み進んで来れた、とも思うところではあるが。

聖だつ人（仙人まがいの修験者や）、才ある法師などは（学識高い講師などは）、世に多かれど（世に多くあるが）、あまりこはごはしう、気遠げなる*宿徳の僧都、僧正の際は（あまりに威厳を持って身構えた徳の高い僧都や僧正といった偉僧は）、*世に暇なく*きすくにて（世事に忙しく生真面目で）、*ものの心を問ひあらはさむも（本質論の問答をするにも）、ことことしくおぼえたまふ

(形式論に終止するように中将には思えなさいます)。　*「宿徳(しうとく)」は＜修行して、身に徳を積んだ人。＞と古語辞典にある。「修行」も「徳」も私には中身が分からないので、なんとも言いようが無いが、「僧都(そうづ)」も「僧正(そうじゃう)」も律令制に於ける僧の官職名とのことで、此処での「宿徳」の語意は＜高位＞のようだ。*「世に暇なく」は＜世俗を捨てた僧が世事に忙しい＞という皮肉、というより冗句だろう。　*「きすく」は「生直」と書いて＜きまじめ＞と古語辞典にある。説法で人を言い包めるのが坊主の仕事なんだから「生真面目」じゃ務まりゃしない、という是も冗句だろう。落語の元は寺の説法だとか言う説もあるようで、やっぱり説法だけで法事の勤めを忘れちゃ有難味も薄れるか。いや、法事を有難がることから考え直さないと、面白い事そのものが世の中から無くなるのかも。いや、もう無いのかも。　*「もののこころ～」の文は難文で、如何言い換えても気持ち悪く、一応は官僚批判に置き換えて言い繕ったが、文旨に私は興味が持てない。できれば、此処の文は「世に暇なくきすくし、とおぼえたまふ」くらいにして置いて欲しかった。

また(また一方で)、*その人ならぬ仏の御弟子の(名もない一仏僧が)、忌むことを保つばかりの尊さはあれど(戒律を守るだけの尊さはあるが)、けはひ卑しく言葉たみて(挙動が卑しく言葉が訛って)、*こちなげにもの馴れたる(無遠慮に馴れ馴れしく)、いとものしくて(とても不愉快で)、昼は、公事に暇なくなどしつつ、しめやかなる宵のほど(昼間仕事に追われて一息吐いた宵時分に)、気近き御枕上などに召し入れ語らひたまふにも(親しく枕元に呼び寄せて話し相手になさるにも)、いとさすがにものむつかしうなどのみあるを(それはさすがに薄気味悪いばかりだが)、　*「その人」は＜それと知れた人＝名のある人＞。　*「こちなし」は「骨無し」と表記され＜不作法である。無礼だ。無骨だ。無風流だ。＞と大辞泉にある。

いとあてに、心苦しきさまして(宮はとても品が良く高貴で)、のたまひ出づる言の葉も(お口になさる言葉も)、同じ仏の御教へをも、耳近きたとひにひきまぜ(同じ法文の御教えも身近な喩えを引き出して)、いとこよなく深き御悟りにはあらねど(非常に高度な御説法ではないが)、*よき人は(王家の人は立ち位置が違って)、ものの心を得たまふ方の(ものの道理をお考えになる見方が)、いとことにものしたまひければ(独特でいらっしゃるので)、やうやう見馴れたてまつりたまふたびごとに(次第に親しくお会い申し上げる度毎に)、常に見たてまつらまほしうて(いつも教えを請いたく思い申して)、暇なくなどしてほど経る時は(忙しくて暫くお目に掛かれない時は)、恋しくおぼえたまふ(中将は物足りない気分を覚えなさいます)。　*「よき人」は＜身分が高い人＞という言い方らしく、注には＜皇族の人をさす＞とある。此処の文意は、王族が臣下身分の者とは違う視点で世界を見ている、という筋で読んで置く。

この君の(この宰相中将の薫君が)、かく尊がりきこえたまへれば(このように八宮を尊敬申し上げなさるので)、冷泉院よりも、常に御消息などありて(冷泉院からもいつもお手紙などがあって)、年ごろ、音にもをさをさ聞こえたまはず、寂しげなりし御住み処(長年、噂にも立ちなさらず、寂しげだった宇治の八宮邸は)、やうやう人目見る時々あり(次第に人影を見る事が時々あるようになりました)。

折ふしに(季節行事があるにつけて)、訪らひきこえたまふこと(冷泉院が八宮にお届け申しなさる贈り物は)、いかめしう(盛大です)、この君も(薫君も)、まづさるべきことにつけつつ(先ずはそういう時に添え物を出しながら)、をかしきやうにも(趣味の品や)、まめやかなるさまにも(実用品など)、心寄せ仕うまつりたまふこと(好意を持ってお贈り申し上げること)、*三年ばか

りになりぬ(三年ほどになりました)。 *「三年ばかりになりぬ」は注に＜薫二十歳から二十二歳。＞とある。私の見方では、薫君 19 歳の年から三年経って、今が四年目の 22 歳の年の話になる、と思うが、何れにしても、三年という時の経過が明示されるのは分かり易い。と、喜んでばかりもいられない。私が、薫君の八宮通いを始めた年を 19 歳の時と推定できたのは、宇治通いで薫君が出生の具体事情を知るに至り、それが故に匂兵部卿巻二章五段に「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず。帝、后の御もてなしに、ただ人にては、憚りなきめでたき人のおぼえにてものしたまへど、心のうちには身を思ひ知るかたありて、ものあはれになどもありければ」とある文の「身を思ひ知るかた」に符合する、と推量してのことだったのであり、薫君が＜出生の具体事情を知る＞筈の当巻四章「薫、出生の秘密を知る」に話はまだ進んでいないのに、「三年ばかりになりぬ」では話がループして倍音ハウリングで基音消失し＜19 歳説＞は根拠を失う、という困った事態になってしまう。しかし、この考え方で行くと＜19 歳説＞ばかりか、あらゆる年齢設定が根拠を失う。となると、やはり頼りとすべきは匂兵部卿巻二章五段の「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中将も離れず」の一文のみ、ということになる。この一文を当巻当章二段の「宰相中将も御前にさぶらひたまひて」に引いて＜19 歳説＞に立つ以外に頼れる数字が無い、のだ。そして、其処での「身を思ひ知るかた」は具体事情ではなく＜疑念のままの状態を言ったもの＞と見做す他はない。論理的な絞込みには失敗したが、手掛かりとなる数字が在っただけ幾らかの救いと思って、改めて＜19 歳説＞に立って、以下の話を薫君 22 歳の時の話として読み進む。